

地上に下ろしてもらった雌株にはブドウの実がいっぱいできた。ちょっと酸っぱく果肉も少ないけれど、得した気分になる。得した気分になるといえば、「山幸」と「清舞」の生垣をつくるのでホームセンターで支柱になるものをいろいろ探していたら、またMさんから「じゃまな木があつて切ろうと思うけど支柱にうってつけなので使わない?」と言ってくれた。「エンジン」という木でも丈夫なのだそうだ。さっそく切るのを手伝いに行つてもらつてきたらちょうど良いサイズで、それも年輪がきめ細かで見えるからに丈夫そうな木だった。左右の支柱の高さを揃えるのに切ると独特の良い香りがした。それに年輪は丈夫なだけでなく美しい。これを薪にして燃やしてしまうのは勿体無いと思ひ。彫刻刀で小さな皿をつくつてみたら、これがなかなか味があつて良いのだ。それにおやつ用のクルミの実を潰してできた油を塗つて見たら、油が木の組織に染み込み濃い鉛色に染まり年輪もくつきり浮き上がつてきた。自然に生えている木と、食器売り場に並ぶ木の器との間をつないで見たことがなかつたが、こうやつて自分の手で木を切り、彫つて油で磨くということをしてみると、その木のことを身体の記憶として別の見え方がするということを経験した。

少し木の道具作りについて調べて見ると、イギリスや北欧などには「グリーン・ウッド・ワーク」というのがあることがわかつてきた。生木加工とでもいうのだろうか。木を切つて生木のうちに手斧や特殊なノミやナイフで削つて器やスプーンなど日用品をつくるというものだ。動画配信サイトでその製作プロセスを見ることができのだが、海外のものはたいして森に入つて行くところから始まる。そしてテントを張り火をおこす。それから森の木や木の瘤などをノコで切つて器などに加工していくというパターン。だから工芸品をつくるというより森の生活で必要なものをそこにあるものでつくるというもののようにだ。だからじっくり時間をかけるといふより、手斧でザクザクザクザクといふ感じである。そうして大抵が立派なヒゲを蓄えている人が製作にあたるというパターンも、自然の恵みを使わせていただく感を強めている気がする。

私には立派なヒゲもないし、森にこもつて器づくりをする気もないが、手斧でザクザクザクザクといふ感じだけは気が引かれた。さっそくネットでその特殊なノミやナイフを取り寄せてみるとウクライナ製だった。木の加工に使える鋭い刃の手斧はスエーデン製だった。そして、もう少しあとになつて手に入れた六センチメートル中の大きな丸ノミはスイス製だった。やはり森と暮らすことの多かつた地方の伝統を引いているのだろうか。

作業をするには、これらの刃物だけでなく、材料を固定する道具とかノミを打つ道具とかあるが、彼らの間ではそれらは手づくりするのが常道のようなのだ。私もそこから初めて見ることにした。少し太めの枝を手ごろな長さで切つて握り手の部分を斧で削つていくと絵に描いたような棍棒ができた。固定する台は丸太を削つて、その隙間に材料を置き木の楔を打ち込んで固定するようだ。これは手元にある端材を使ったが、楔は木をけずつてつくつてみた。

